

# 国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの歴史教育

## —評価目標の分析からの一考察—

橋 本 直 賢

### はじめに

本稿の目的は、国際バカロレア（International Baccalaureate, 以下 IB）のディプロマ・プログラム（Diploma Programme, 以下 DP）の科目「歴史」（以下 DP 歴史）で評価される能力の特徴を明らかにすることである。IB は、国際バカロレア機構（以下 IBO）が提供する教育プログラムであり、現在、世界中の学校で導入されている。日本でも IB は注目されており、例えば、文部科学省は「グローバル人材育成の観点から、我が国における国際バカロレア（IB）の普及・拡大を推進しています」と述べ、IB の概要や推進の取り組みについて紹介している<sup>(1)</sup>。また 2013 年 6 月 14 に閣議決定された「日本再興戦略—JAPAN is BACK—」では、一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの認定校等を 2018 年までに 200 校に増やすことを目指すとしている。

IB に注目が集まる中で、IB が実際にどのような人材を理想とし、どのような方法でその人材を育てようとしているかを明らかにすることは重要であると考えられる。それは、文部科学省が述べてるように、IB がグローバル人材育成に適切かどうかを明確にすることにもつながり、また、IB のねらいや評価の特徴を分析することで、学習者が実際にどのようなスキルや能力を体得するのかを明らかにすることもできる。

先行研究において、IB で育成される能力を明らかにしようとする試みが行われてきた。例えば、御手洗（2011）は、中等課程プログラム（Middle Years Programme, 以下 MYP）の第二言語の日本語である「Japanese B」に着目し、それが「どのような『知』を重視しているのか、またそれを教育現場でどのように教えるのか、生徒の学習結果をどのように測定するのか」を分析した。そこでは、「『常に質の高い作品を生み出す』または、『新たな知見を生み出す』能力に重きが置かれている」（御手洗 2011, p. 96）ことや、教育現場では「一定量の知識を習得するという形ではなく、生涯に渡って学び続けることができるよう『学び方・思考法』」（御手洗 2011, p. 97）を学ぶことなどが指摘されている。

本稿で扱う DP 歴史においても、その科目の内実を明らかにしようとする先行研究がある。青木（1998）は、DP 歴史の目標やシラバス、学習内容、試験と採点の方法について概説しているが、ここでは DP 歴史がどのような科目であるか、その全体を知るうえで、有益な情報を提供している。また、津山（2013）は IB と学習指導要領のインターフェイスの可能性を探るために、ウィギンズ

(Wiggins, G.) とマクタイ (McTighe, J.) の「逆向き設計」論による「日本史 B」の実践をし、分析することで、日本の学校教育の中に IB がどのように生かされるかを明らかにした。そこでは「国際バカロレアの評価基準『規準 A: knowledge (知識)』『規準 B: concepts (概念)』『規準 C: skills (スキル)』は、これまで曖昧で主観的にしか判断できなかった知識の概念化や思考の論理性などを明確に可視化・言語化することを可能」(津山 2013, p. 248) にすることを指摘している。

これらの研究は、DP 歴史の概要を理解することや実際の授業実践との関連の中で DP 歴史がどのように生かされるかを明らかにした。しかし、青木論文の内容はあくまで概略的なものであり、DP 歴史がどのような能力の育成に力を入れているのかを明らかにしていない。また、津山論文では、分析の過程で評価規準の「規準 A」「規準 B」「規準 C」は扱っているが、これらは評価の一部に過ぎず、「科目の履修時に生徒に何が期待されおり(ママ)、何が評価されるか」(国際バカロレア機構 2014, p. 43) を示す「評価目標 (Assessment objectives)」を扱っていない。そこで本稿では、上記の研究が扱っていない「評価目標」に着目し、それを分析することで DP 歴史が評価する能力を明らかにする。DP 歴史の評価目標は、後に詳説するブルーム (Bloom, B. S.) の「教育目標の分類学」(以下、ブルーム・タキソノミー<sup>(2)</sup>) の認知領域を最も関連する形で採用している。IB すべての科目において、ブルーム・タキソノミーを DP 歴史と同様の形で評価目標に採用しているわけではないが、関連がある科目もあるため、本稿で明らかにする内容は他の科目にも示唆を与えると考える。

本稿では、以下のように論を進める。まず、IB プログラム全体の特徴を示す IB 学習者像、学習と指導の方法を概説する。その後、DP 歴史のねらいと評価目標の特徴を明らかにする。そして最後に考察を述べる。IB 全体の特徴を述べてから DP 歴史の特徴を述べるのは、DP 歴史では IB 全体で評価される能力のどの部分に力点が置かれているかを明らかにするためである。

## 1. IB 教育の特徴

IB は子どもの年齢や必要に応じて、次の 4 つのプログラムを提供している。それらは、3 歳から 12 歳を対象とした PYP (Primary Years Programme)、11 歳から 16 歳を対象とした MYP、16 歳から 19 歳を対象とした DP、16 歳から 19 歳を対象とし、キャリア関連学習をする CP (Career-related Programme) である。

IB は、4 つのプログラムすべてにおいて育成されるべき IB 学習者像 (IB learner profile) を提示している (国際バカロレア機構 2014, p. 36)。そこでは「すべての IB プログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。」(国際バカロレア機構 2014, p. 4) と述べられ、それを実現しうる人材の構成要素として、「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションが出来る人」「信念を持つ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」「バランスの取れた人」「振り返りができる人」という 10 項目の性質が想定されている。

IB 学習者像を実現するために、生徒は「学習の方法 (approaches to learning)」と呼ばれる 5 つの

スキルの育成と「指導の方法（approaches to teaching）」と呼ばれる IB の教育観を反映した 6 つの指導がされる。学習の方法と指導の方法は、『「歴史」教師用参考資料』において、DP 歴史に即した形での提案および参考例が示されている。ここでは一例として、両者を『「歴史」教師用参考資料』に基づいて、簡潔に紹介する（国際バカロレア機構 2015a, pp. 8-13）。学習の方法の 5 つのスキルは「思考スキル」「社会性スキル」「コミュニケーションスキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」である。これらの内容を表 1 で示す。

「思考スキル」では、例えば、DP 歴史で使用される「指示用語（command term）」を適切に理解し、それに応じた思考ができるようになることが求められる。「指示用語」とは、例えば、「比較しなさい（Compare）」「対比しなさい（Contrast）」といった生徒に特定の行動を要求する言葉である。「比較しなさい」は、「2 つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。」と定義づけられており（国際バカロレア機構 2015b, p. 79）、生徒は指示用語の定義に応じた様々な思考スタイルを身につける必要がある。

「社会性スキル」は、グループ研究などの共同作業やお互いの成果物を見せ合い、評価することなどが求められる。「コミュニケーションスキル」は、論文の構成や序論や結論の書き方などの論文を書くスキル、視覚資料や地図といった視覚リテラシーなどのスキル、口頭プレゼンテーションのスキルなどである。「自己管理スキル」は、計画的な学習、時間管理、自分に合った学習方法などを身につけることである。「リサーチスキル」は、引用する際の出典の明示や学問的誠実性（academic honesty）の重要性を理解することや、生徒が自らの力で資料を調べることなどである。以上のようなスキルを生徒が身につける機会を与えることが教師には期待されている。

表 1 学習の方法のスキル

思考スキル	批判的思考力 創造と革新 転移	<ul style="list-style-type: none"> <li>一問題やアイデアを分析し評価するスキル。</li> <li>一新しく適切な方法で課題やアイデアを熟考するためにイニシアチブを発揮するスキル。</li> <li>一新しい関連を作り、そして、知識やスキル、理解を新しい状況に応用することで学習するスキル。</li> </ul>
社会性スキル	協働	<ul style="list-style-type: none"> <li>一他者と協力的に作業するスキル。</li> </ul>
コミュニケーションスキル	インタラクション リテラシー	<ul style="list-style-type: none"> <li>一思考やメッセージ、情報を効果的に交換するスキル。</li> <li>一読み書き及び、適切に情報を伝達したり、文脈に応じて書くために言語を使うスキル。</li> </ul>
自己管理スキル	情意スキル 組織化 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>一集中力を養うことによって感情を管理するスキル。</li> <li>一時間や資源、情報を効果的に使うスキル。</li> <li>一メタ認知を通して、個人の成長を支えるために学んだこと、経験したことを熟考、再考するスキル。</li> </ul>
リサーチスキル	情報とメディア リテラシー	<ul style="list-style-type: none"> <li>一情報とメディアのメッセージを巧みに作り出したり、新しく創造するスキルはもちろん、情報とメディアの使用として、情報に基づいた判断をしたり、解釈するスキル。</li> </ul>

出典：International Baccalaureate Organization (2014), *Individuals and Societies: A Practical Guide (Student Book)*, Cardiff: IBO, p. 7 の表を筆者訳出。

6つの指導の方法とは「探究を基本とした指導」「概念に重点を置く指導」「『ローカル』と『グローバル』の両方のレベルで文脈化した指導」「効果的なチームワークと協働に基づく指導」「すべての生徒のニーズに応じて差別化した指導」「評価の情報に基づく指導」である。

「探究を基本とした指導」は、生徒の主体性を重んじ、また生徒が実際に経験を通して学べるように教師が工夫することである。「概念に重点を置く指導」において、DP 歴史は「変化」「連続」「原因」「結果」「重要性」「視点」の6つの主要概念が歴史に対する考え方を形成する際に重要な役割と考えているため（国際バカロレア機構 2015b, pp. 76-77）、教師が授業を行う際には、どの概念を扱うのかを特定することが求められる。「『ローカル』と『グローバル』の両方のレベルで文脈化した指導」は、生徒の興味次第では、生徒が住んでいる地域を扱ったり、生徒が歴史の複雑性を学べるようにすることである。「効果的なチームワークと協働に基づく指導」は、生徒同士が議論や討議をする機会を設けるとともに、相手を尊重する姿勢を身につけることができるようにすることである。「すべての生徒のニーズに応じて差別化した指導」は、生徒の学習スタイルに合ったものを生徒が見つけるように促すことが求められ、「評価の情報に基づく指導」は、生徒がどのように評価されるかを理解することや、生徒と教師が適切に形成的評価に取り組むことである。教師は、以上のような視点を意識して指導することが期待されている。

上記した学習の方法と指導の方法の説明は、IBO が提示する一例であり、各内容のごく一部でしかない。また、指導方法を規定するものでもない（国際バカロレア機構 2015a, p. 11）。ただ確かなことは、教師による様々な指導の方法を通して、5つの質の異なるスキルを、生徒がバランスよく身につけることが奨励されていることである。

## 2. DP 歴史のねらい

DP 歴史で培われる能力とはどのようなものであるか。その一端を明らかにするために、『「歴史」指導の手引き』に基づいて、DP 歴史のねらいを概観する。簡潔ではあるが、DP のカリキュラムを述べた後、DP 歴史のねらいを述べる。

DP は原則、16-19歳の生徒を対象とした2年間の教育プログラムである。生徒は、3つのコアである「課題論文 (Extended essay)」「知の理論 (Theory of knowledge)」「創造性・活動・奉仕 (Creativity, activity, service)」と6つのグループ「言語と文学 (Studies in language and literature)」「言語の習得 (Language acquisition)」「個人と社会 (Individuals and societies)」「理科 (Sciences)」「数学 (Mathematics)」「芸術 (The arts)」の各グループ内から1科目ずつ選択し、履修することになっている。ただ、「芸術」に関してはそれを履修する代わりに、他のグループから1科目選択することによって代替できる。これらを選択する際には、年間240時間の上級レベル (Higher Level : HL) を3、4科目履修し、残りの科目を年間150時間の標準レベル (Standard Level : SL) で履修することになっている。DP 歴史はグループ3「個人と社会」に属している。以下に、グループ3「個人と社会」のねらいと DP 歴史のねらいの両方を引用する（国際バカロレア機構 2015b, p. 11）。

## 「個人と社会」（グループ3）のねらい

グループ3「個人と社会」の科目はすべて、以下の点を学習のねらいとしています。

1. 「人々の経験と行動」, 「物理的・経済的・社会的環境」, 「社会制度や文化的慣習の発展とその歴史」について、体系的かつ批判的な学習を奨励する。
2. 個人と社会の性質や活動についての理論、概念、議論を認識して、それらを批判的に分析、評価する力を育む。
3. 社会を研究するためのデータを収集して説明および分析する能力、仮説を検証する能力、複雑なデータや文献を解釈する能力を育む。
4. 学ぶということは自分たちが属する社会の文化と他の社会の文化の双方に関連するものであるという理解を促す。
5. 人々の態度や意見は多様であり、社会の研究にあたってはその多様性を受け入れる必要があるという理解を育む。
6. グループ3の科目の内容や方法論には議論の余地があり、この分野の学問では不確実性を容認する姿勢が求められるという認識を育む。

## 「歴史」のねらい

上記に加え、「歴史」（SL・HL）では、以下の点もねらいとしています。

7. 過去に対する理解と、過去への飽くなき興味を育む。
8. 多数のものの見方に触れて、歴史的な概念、問題、出来事、発展の複雑さに価値を認めるよう奨励する。
9. 複数の地域の歴史を学ぶことにより、国際的な視野を育てる。
10. 学問領域としての歴史に対する理解を育み、年代や前後関係の感覚をはじめとする歴史的な意識を育て、歴史に対する異なる視点の理解を育む。
11. 文献を的確に扱うスキルなど、歴史学の重要なスキルを習得する。
12. 過去を考察することにより、自分自身と現代の社会に対する理解を深める。

ここで示されている「ねらい」は、「科目の学習における到達目標と目的」とであるとされている（国際バカロレア機構 2014, p. 43）。「個人と社会」（グループ3）のねらいを見ると、1で示されている「体系的かつ批判的な学習」といった学習のアプローチの仕方や、2で示されている「批判的に分析、評価する力」、3の「データを収集して説明および分析する能力」や「仮説を検証する能力」、「複雑なデータや文献を解釈する能力」といった学問的な能力の育成に重きが置かれている。4と5では、文化の双方の関連性、人々の態度や意見の多様性の理解といった社会科学固有の考え方を身につけることが期待されている。また、6では不確実性を受け入れる姿勢を身につけることが期待されている。

「歴史」のねらいは、8の「歴史的な概念、問題、出来事、発展の複雑さに価値を認めるよう奨励



する」といった表現や、9の「複数の地域の歴史を学ぶことにより、国際的な視野を育てる」、10の「年代や前後関係の感覚をはじめとする歴史的な意識を育てる」など、歴史教育特有の内容が示されている。また、11の「文献を的確に扱うスキルなど、歴史学の重要なスキルを習得する」といった表現から、グループ3よりも歴史学に焦点化した内容になっている。7の「過去への飽くなき興味を育む」といった情意に関わる内容は、今回改訂される前のIBOの資料である2008年度版の『「歴史」指導の手引き』では提示されていなかったが、2015年度の改訂版では新しく設けられている。

### 3. DP 歴史が評価する能力の特徴

DP 歴史の評価について、『「歴史」指導の手引き』に基づいて以下に概観する。そして、そこからDP 歴史が評価する能力の特徴を明らかにする。

DP 歴史の最終的な成績は、2年間の授業後に行われる最終試験と、各生徒の興味や関心に基づいて行われる調査である歴史研究の成績で付けられる。試験は標準レベルを履修している学生は、試験問題1（paper 1）と試験問題2（paper 2）を受験し、上級レベルの学生はそれらに加え、試験問題3（paper 3）を受験する。試験問題1は複数の資料を扱う論述問題であり、試験問題2と試験問題3は試験問題1よりも長い論文作成問題である。

成績の得点配分は、標準レベルの学生の場合、試験問題1が30%、試験問題2が45%、歴史研究の25%であり、上級レベルの学生の場合、試験問題1が20%、試験問題2が25%、試験問題3が35%、歴史研究が20%である。試験の採点は、「各試験問題用の詳細なマークスキーム（採点基準）」と「マークバンド（採点基準表）」が使用され、学校外部のIB試験官によって採点される。歴史研究では、語数制限2200語（日本語の場合は4400字）のレポートであり、3つの規準によって採点される。3つの規準は「資料の説明と評価（500語、日本語1000字）」「研究（1300語、日本語2600字）」「考察（400語、日本語800字）」であり、それぞれにマークバンド（評価基準表）があり、それに基づいて採点される。

試験と歴史研究で採点の仕方に違いはあるものの、DP 歴史の最終評価には「評価目標」が強く影響している。前述したが、評価目標は「科目の履修終了時に生徒に何が期待されおり（ママ）、何が評価されるか」（国際バカロレア機構2014, p. 43）を示すものである。評価目標の内容は以下である（国際バカロレア機構2015b, p. 12）。

#### 評価目標1：知識と理解

- 詳細、適切、正確な歴史の知識がある。
- 歴史的概念と歴史的文脈を理解している。
- 歴史の文献に対する理解を示す。（内部評価と「試験問題1」）

#### 評価目標2：応用と分析

- 明確で論理的な議論を組み立てる。

- 関連性の高い歴史的な知識を使用して、分析を効果的に裏付ける。
- さまざまな文献を分析し、解釈する。（内部評価と「試験問題 1」）

評価目標 3：知識の統合と評価

- 証拠と分析を統合して、論理的な議論を構築する。
- 歴史上の問題や出来事についての異なる視点を評価して、議論に有効に統合する。
- 歴史的根拠として文献を評価し、その価値と限界を認識する。（内部評価と「試験問題 1」）
- 関連する文献から得た情報を統合する。（内部評価と「試験問題 1」）

評価目標 4：適切なスキルの使用と応用

- 設問の要求に的確に応える、的の絞れた小論文を構成し、作成する。
- 歴史学者が用いる方法論と歴史学者が直面する課題について考察する。（内部評価）
- 歴史の探求を導く適切かつ的の絞れた質問を組み立てる。（内部評価）
- リサーチスキル、および適切な文献を選択して参照し整理する能力があることを示す。（内部評価）

上記のように、DP 歴史の評価目標は「知識と理解」「応用と分析」「知識の統合と評価」「適切なスキルの使用と応用」の 4 つから構成されている。「知識と理解」「応用と分析」「知識の統合と評価」は、前述したブルーム・タキソノミーの認知領域に対応している（IBO 2004, p. 17）。

ブルームは人間の認知スキルを「知識」「理解」「応用」「分析」「統合」「評価」の 6 つに分類した。6 つのカテゴリーの定義は、表 2 の通りである<sup>(3)</sup>。IBO では、6 つのカテゴリーをそれぞれ測定するために、前述した指示用語を使用している（国際バカロレア機構 2014, p. 43）。

この認知領域の特徴として、それぞれの認知スキルが階層性を有しており、単純なものから複雑なものへ移行していくと同時に、その認知スキルは累積されていることが指摘されている（石井 2011, pp. 33-35）。つまり、「知識」は「理解」以降の 5 つの認知スキルの前提条件となっており、また「知識」から「評価」へと進むごとに、そこで扱われる認知スキルは高次化している。

DP 歴史の評価目標に戻ると、ブルーム・タキソノミーの理論通り、評価目標 1 から評価目標 3 にかけて学習者に求める認知スキルが高次化している。例えば、評価目標 1 では「詳細、適切、正確な歴史の知識がある」といった単純な認知スキルを扱っているのに対し、評価目標 2 では「明確で論理的な議論を組み立てる」といった評価目標 1 で示された「知識がある」といった段階よりもそれらの知識を活用した複雑な認知スキルが扱われている。

そして、評価目標 3 では「証拠と分析を統合して、論理的な議論を構築する」とあり、これは「証拠と分析を統合する」という評価目標 1, 2 の過程を踏んだ上で、論理的な議論が構築されることから、評価目標 2 よりも高次の認知スキルを要求されているのがわかる。これらからも明らかなように、評価目標 3 に進む際、先行の目標である評価目標 1, 2 と関連しながら、段階的に高次の認知スキルへと変質していることがわかる。

表2 ブルーム・タキソノミーの認知領域

認知領域
<b>1.00 知識 (knowledge)</b> 以前に学習したことを記憶していて、心の中に適切な素材を思い浮かべる（想起する）ことができること。想起すべき「知識」には、個別的な特定の事実から、複雑で一般的な原理や理論まで含まれ、方法やプロセスも含まれる。
<b>2.00 理解 (comprehension)</b> 伝えられた素材や観念の意味がわかること。ある内容をもとの形式から別の形式に翻訳したり、説明・要約したり、伝えられた内容から予測できる結果を把握したりできること。
<b>3.00 応用 (application)</b> 学習した内容を、新しい具体的な状況で活用できること。
<b>4.00 分析 (analysis)</b> 一つのコミュニケーションを構成要素あるいは部分に分解し、構成要素間の関係を明らかにするとともに、コミュニケーション全体を統一性のあるものに行っている、明示的・暗示的な階層的構造や組織原理を明らかにすること。
<b>5.00 統合 (synthesis)</b> 要素や部分を結合して一つの新しい全体を形作ること。独自の論文、スピーチ、芸術作品の作成、実験計画や企画書の作成、新たな枠組みや分類法の提案などが含まれる。
<b>6.00 評価 (evaluation)</b> 与えられた目的や明確な規準に照らして、素材や方法の価値を判断できること。規準については、内的規準と外的規準があり、生徒が自分で設定する場合もあれば他から与えられる場合もある。

出典：石井英真（2011）『現代アメリカにおける学力形成論の展開——スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂，p. 342 の資料 1 を一部省略・変更。「知識」から「評価」までの 6 つのカテゴリーを構成するサブカテゴリーに関しては、記載を省略した。また，**Synthesis** について，石井は「総合」と訳しているが、『「歴史」指導の手引き』では「統合」と訳されている。ここでは、「統合」に変更して引用した。

評価目標 4 は、「的の絞れた小論文を構成し，作成する」といった論文作成のスキルや「リサーチスキル，および適切な文献を選択して参照し整理する能力があることを示す」といった文献を扱うスキルなどが求められている。

ここで評価目標の特徴，つまり，DP 歴史が最終的に評価する能力の特徴を整理しよう。今まで示してきたように，評価目標 1～3 はブルーム・タキソノミーの認知領域を採用していることから，学習者の認知スキルの水準を測定している。これは第 1 節で扱った学習の方法の「思考スキル」と最も関係があると考えられる。また，評価目標 4 に関しては，論文を構成するスキルや文献を扱うスキルを扱っていることから，「コミュニケーションスキル」と「リサーチスキル」と最も親和性が高いと言える。5 つのスキルのうち，「社会性スキル」や「自己管理スキル」を直接的に測定する評価目標は設定されていないと言える。つまり，DP 歴史では，第 1 節で示した 5 つのスキルのうち，評価目標においては，「思考スキル」「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」に焦点化した能力を評価しようとしていることが分かる。



## 4. 考察

以上、IB 学習者像と学習の方法、指導の方法、DP 歴史のねらいの特徴を言及した後に、評価目標の分析を通して、DP 歴史で評価される能力の特徴を明らかにしてきた。それは、IB すべての教育では、「思考スキル」「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」という幅広い能力の育成を目的とするが、DP 歴史の評価目標に限っては、「思考スキル」「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」が中心項目になっていることである。

しかし、それはDP 歴史が「社会性スキル」「自己管理スキル」の育成に貢献しないことを意味しない。なぜなら、IBO が「学習の方法」と「指導の方法」は、「IB の教育を支える重要な価値観と原則が含まれています。」（国際バカロレア機構 2015b, p. 4）と明言しており、実際にこれらに含まれる教育実践には「社会性スキル」「自己管理スキル」に関わる内容を多く含んでいるからである。例えば、「学習の方法」でも示したように、DP 歴史の教師は日々の授業において、生徒が他者と協働できる機会を与えることが奨励されており、また、歴史研究においても、生徒はレポートを完成させるために自分で計画を立て、提出期限を守るなどの自己管理をする機会が多く与えられている。また、「指導の方法」においても、「効果的なチームワークと協働に基づく指導」が重んじられている。そして、何よりも5つのスキルは、1つのスキルが獲得される際にも相互に作用し、ともに成長することも十分に考えられる。つまり、「思考スキル」「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」が評価される最終試験、歴史研究においてハイ・パフォーマンスを発揮するためには、「社会性スキル」「自己管理スキル」が高いレベルで習得されている必要があるとも考えられるのである。

ただ、もし教師が、生徒に「社会性スキル」「自己管理スキル」の2つのスキルを習得することを期待する場合、教師はDP 歴史で最終的に評価される能力の特徴に自覚的である必要があるだろう。なぜなら、ガニエ（2007）が指摘しているように、異なる種類の学習成果を習得するためには、それぞれによって異なる「学習の条件」を必要とするからである<sup>(4)</sup>。それは、それぞれのスキルの質の違いが、学習のプロセスの違いに影響することを意味し、また、学習者がどのような知識やスキルを既に身につけているかで教育の方法が変化することを意味する。

実際、DP 歴史の評価目標では、「思考スキル」に関わる「知識」から「評価」にかけて、認知領域の階層差を示すことで各階層の認知スキルに適した教育がし易いようになっていると見ることがができる。しかし、それに比べたら評価目標4で示されている「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」は、それら自身に難易度の異なる「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」があるのか分からない状態であるとも言える。他の2つのスキルに関しては評価目標からは観察できない。

このことから、DP 歴史では評価目標を見る限り、「思考スキル」「コミュニケーションスキル」「リサーチスキル」に焦点化した能力を評価するが、相対的に「思考スキル」の方が学習と評価がされやすい構造を有しており、逆に、他の4つのスキルを学習者が身につけたい場合、教育者、学習者はDP 歴史の評価目標の構造の特徴を強く自覚した上で、それぞれのスキルに適した学習と指導の過程

を想定する必要があると言える。IB 教育に着目して、グローバル人材育成のヒントを得ようとしている日本において、DP 歴史がどのようなスキルの評価に優位であるかについて意識的であることは肝要であろう。

## おわりに

本稿は IB 教育の特徴を始めに提示した後に、DP 歴史に焦点を当て、特に評価目標を分析することで、最終的に評価される能力の特徴を明らかにした。結論として、評価目標を見る限りでは、DP 歴史で評価される能力が特定されていることを指摘した。グローバル人材の一部である「主体性・積極性」、「チャレンジ精神」<sup>(5)</sup>などは、DP 歴史の評価目標以外で評価される必要があると言える。また、DP の他の科目で DP 歴史と似た構造の評価目標を採用している科目においても、評価される能力がどのように特定されているかを意識することは重要であろう。

本稿の限界は、分析対象として DP 歴史の評価目標しか扱えていないことである。つまり本稿で明らかにしたことは DP 歴史の一部にすぎず、全体像を捉えきれていないことが限界である。また、他の DP の科目、特に主体性や社会性を養うことに有効であると考えられる「創造性・活動・奉仕」を扱えていないことも課題である。学習者の情意に関わる能力において、IB がどのような発達段階や学習の条件を想定しているのかを明らかにすることは意義があるだろう。DP 歴史の評価目標だけでなく、DP や IB のプログラム全体へと研究領域を拡大し、IB で育成される能力の特徴を具体的に明らかにしていくことが今後の課題である。

注(1) 文部科学省「国際バカロレアについて」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/), 2015/09/20 閲覧)

(2) ブルーム・タキソノミーでは、認知領域と情意領域と精神運動領域の3つが提示されている。しかし、DP 歴史の評価目標はこの認知領域のみを採用している。

(3) ブルーム・タキソノミーの認知領域に関する原著は、以下である。

Bloom, B. S. et al. (1956), *Taxonomy of Educational Objectives. Handbook 1: Cognitive Domain*, New York: David McKay. ここでは、石井が図表化したものを引用した。

(4) ガニエは学習目標を「知的技能」「認知的方略」「言語情報」「態度」「運動技能」の5つに分類した上で、それらが効果的に学習されるためには、学習者の内的条件と外的条件を区分し、それぞれに適した学習の条件を設定する必要があることを指摘している。

(5) グローバル人材は、グローバル人材育成推進会議の「グローバル人材育成戦略 審議まとめ」(2012年6月4日), p. 8 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>, 2015/09/20 閲覧)において、以下の3つの要素を含むとされている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

## 引用・参考文献

青木義子 (1998)「第3章 人間学 第1節 歴史」高野文彦・浅沼茂編 (1998)『国際バカロレアの研究』研究プロジェクト報告書、東京学芸大学海外子女教育センター, pp. 43-50。

- ブルーム, B. S. 他 (1973) (梶田叡一・渋谷憲一, 藤田恵璽訳) 『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価—』 第一法規。(= Bloom, B. S. et al. (1971), *Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning*, New York: McGraw-Hill.)
- ガニエ, R. M. 他 (2007) (鈴木克明, 岩崎信監訳) 『インストラクショナルデザインの原理』 北大路書房。(= Gagné, R. M., et al. (2005) *Principles of Instructional Design* (5th ed.). Belmont, CA: Wadsworth/ Thomson Learning, Inc.)
- International Baccalaureate Organization (2004), *Diploma Programme assessment Principles and Practice*, Cardiff: IBO.
- International Baccalaureate Organization (2014), *Individuals and Societies: A Practical Guide (Student Book)*, Cardiff: IBO.
- 石井英真 (2011) 『現代アメリカにおける学力形成論の展開——スタンダードに基づくカリキュラムの設計』 東信堂。
- 国際バカロレア機構 (2014) 『DP: 原則から実践』 (= International Baccalaureate Organization (2009), *The Diploma Programme: From principles into practice*, Cardiff: IBO.)
- 国際バカロレア機構 (2015a) 『「歴史」教師用参考資料』 (= International Baccalaureate Organization (2015), *History teacher support material guide*, Cardiff: IBO.)
- 国際バカロレア機構 (2015b) 『「歴史」指導の手引き』 (= International Baccalaureate Organization (2015), *History guide*, Cardiff: IBO.)
- 御手洗明佳 (2011) 「国際バカロレアの評価方法にみる能力観」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』 第18号-2, pp. 87-98。
- 津山直樹 (2013) 「国際バカロレアと学習指導要領のインターフェイスの可能性—『逆向き設計』論による『日本史B』の実践を事例に一」 東京学芸大学付属国際中等教育学校研究紀要『国際中等教育研究』 第6号, pp. 235-250。